声に出して読もう！宗祖親鸞のことばを。

親鸞という存在は、私にとっては、いつもかたわらにいて下さっている人生の師匠です。私の日常は、出口のない真っ暗闇なトンネルの中にいるようなことが多々あります。そのような思いの時、師匠の言葉は、深く身心に刻んでくれます。

それでは日頃親しんでいる親鸞聖人作「正信偈」の一節を大きな声を出して読んでみましょう。

摂取の心光、つねに照護したまう
すでによく無明の闇を破すといえども貪愛・瞋憎の雲霧
つねに真実信心の天に覆えり
たとえば日光の雲霧に
覆わるれども雲霧の下
あきらかにして闇なきがごとし

（依経段・釈迦章）

【意　訳】　救いの光はつねに私たちを護り、無明の闇を打ち破って下さっている。それでもむさぼりや怒りなどさまざまな煩悩が雲や霧のようにまことの心を覆う。けれども、太陽が輝いているかぎり雲や霧に覆われていても地上に闇がないように、わたし達を灯火のごとく導いてくださる。

昭和初期に活躍された民芸研究家に柳　宗悦氏がおられる。その方の著書に題名「南無阿弥陀佛」がある。（いまは岩波文庫におさめられている）その序文の冒頭「日本の村々を歩くと、南無阿弥陀佛の六字を刻んだ石碑の見当たらぬ地方はないくらいである。念佛衆の寺々にはもとより、路傍にも樹陰にも、幾基かの碑をよく見かける」云々。

南無阿弥陀佛はインドのことばである。何度かインドにお邪魔する機会を得たが、その都度インドの民衆から、合掌して「ナマステ」と言葉をかけられた。日常のあいさつが「ナマステ」である。

南無阿弥陀佛は日本人の言葉に溶け込んでいる。昨今は南無阿弥陀佛を知っていても発することに抵抗を感じる人が少なくない。それらは、意味内容が分からないからである。

南無阿弥陀佛とは、呪文ではない。「無量壽（量る事の出来ない、いのちの覚者に帰依する）」と云う意味で、それを称えるのは、朗読のおもむきをもっている。

（去る１２月１７日来寺の奈良コープ平和の会の皆さん）